

春のあそび具
こま

解説

「私のコレクション展」 第九回高嶋一元氏収集

目録

九ひか佐変飛ひ紅彦道大けだ糸竹た鉄親かサうか追だ六うう親だ野夫い相花	十ね	八り	こご	ま	(箱入)
ね	ね	り	ご	ま	(佐賀)
か	け	保	ご	ま	(長崎)
佐	世	り	ご	ま	(")
変	り	だ	ご	ま	(熊本)
飛	び	し	ご	ま	(")
ひ	ね	り	ご	ま	(")
紅	一	ご	ま	ま	(佐賀)
彦	中	ご	ま	ま	(熊本)
道	山	ご	ま	ま	(大阪)
大	か	ご	ま	ま	(神奈川)
け	ん	ご	ま	ま	(大分)
だ	る	ご	ま	ま	(福島)
糸	引	ご	ま	ま	(群馬)
竹	ご	ま	ま	ま	(三重)
た	け	ご	ま	ま	(佐渡)
鉄	銅	ご	ま	ま	(石川)
親	子	ご	ま	ま	(遠刈田)
か	け	ご	ま	ま	(")
サ	一	カ	ス	ゴ	(")
う	な	り	ご	ま	(宮城)
か	な	ご	ま	ま	(")
追	け	ご	ま	ま	(")
だ	か	ご	ま	ま	(")
六	る	ご	ま	ま	(")
う	角	ご	ま	ま	(")
う	り	ご	ま	ま	(")
親	な	ご	ま	ま	(")
だ	子	ご	ま	ま	(")
野	孫	ご	ま	ま	(")
夫	菜	ご	ま	ま	(東京)
い	婦	ご	ま	ま	(")
相	わ	ご	ま	ま	(")
花	る	ご	ま	ま	(")
	模	ご	ま	ま	(")
	ご				(")

あ花く糸ベズ二ちこ花野五けて投糸笛手手おけらくなり平三あけいかよ糸	て	ご	ま	(東京)
	ご	ま	ま	(")
	ら	ご	ま	(")
	引	ご	ま	(")
	い	ご	ま	(")
	グ	ご	ま	(青森)
	ズ	ご	ま	(")
	ち	ご	ま	(山形)
	ん	ご	ま	(")
	し	ご	ま	(")
	ご	ま	ま	(")
	菜	ご	ま	(")
	色	ご	ま	(")
	か	ご	ま	(宮城)
	く	ご	ま	(")
	ん	ご	ま	(")
	げ	ご	ま	(")
	ひ	ご	ま	(")
	品	ご	ま	(")
	ご	ま	ま	(")
	し	ご	ま	(")
	ん	ご	ま	(山形)
	き	ご	ま	(")
	り	ご	ま	(")
	す	ご	ま	(")
	ん	ご	ま	(")
	角	ご	ま	(")
	て	ご	ま	(")
	ん	ご	ま	(")
	ろ	ご	ま	(")
	け	ご	ま	(")
	た	ご	ま	(")
	引	ご	ま	(")
	以	上		122 点

春のあそび具「こま」展

こまの歴史 「こま」は「独楽」と書き、古くから伝えられたものです。「和名抄の中に「古末豆久利」とあり「こまつくり」とか「こまつぶりと呼ばれていました。

「こま」は、古くは運だめしの用具に利用されたりしたが、平安時代の貴族たちが、宮庭にて催された神仏会の余興の中で、あそび具として貴族たちがもて遊んだようです。また、「太平記」によると寺社の境内で「こま」を廻わしてあそぶ童たち……とあり、この頃よりわらべの遊び具となったと考えられます。古今東東南アジアあたりは、木の実や貝殻を使って「こま」を廻し、占いの道具として使っていたそうです。これらが、古い時代に日本に伝わって来たのだと思われる。

「こま」は、子どもたちの初春のあそび具といわれるようになったのは、江戸時代になってからで、木や竹を細工して「こま」を作りました。そのほかに、「海螺しを使ってばいこま、ペイゴマが作られ、江戸の子どもたちは争って作り廻したそうです。(好色一代女より)

「こま」が遊芸用利用され、曲芸師が生れたのは元禄頃からで、博多の芝居小屋で大当りをしてから、長崎や博多、江戸に伝えられ、「こま」の曲芸師は、今でもその伝統を守り伝えています。殆んど、曲芸師は旅芸人で、子どもたちは見真似で曲芸を少しづつ覚え、「こまの綱渡り」「こまの木渡り」など、東北の子どもまで行なうようになり、今日に至っています。

こまの種類 「こま」ぐらい簡単に作れるものはありません。秋になると「どんぐりこま」などの木の実こまが作られます。五円玉のような穴あき銭で「銭こま」を作ります。江戸時代には「寛永通宝」の穴あき銭で「銭こま」を作り「かけこま」をやって禁止されました。山形県では陶土で作られた戸車を用いて「戸車こま」を作った遊んだりしました。もつとも普及したのは「木地こま」でしょう。温泉場や山の木地師たちは「ズングリ」を作ったり、「平こま」「あてこま」「けんかこま」などを作りました。温泉場の土産物になった「こま」は、「こけし」のように色採豊かな「こま」に彩色されて売られました。木地師たちは、「こま」にいろいろな細工を行なうようになり、「細工こま」を作るようになりました。「追い、かけこま」「だるまこま」。「二階ズングリ」。「サーカスこま」。「うなりこま」などが各地に生れました。子どもたちが、一銭店から「木地こま」を買い、鉄の馬蹄をもって村の鍛冶屋に行き「鉄銅こま」を作りました。大きさによって「一つ金」。「二つ金」。「三つ金」と呼び、大きさと廻りの良さ、けんかさせてはその強さを誇りました。別名「かねこま」とも呼んでいます。

こまあそび 「こま」と「こま」をぶつけあって相手を倒す遊びは「けんかこま」といい、「べいこま」もたらいの上にごさをしいて、それから落ちたものは負けとなります。「かけこま」は「東西南北」とか「一。三。五。七」とか「いろはには」とか書かれてあり、「こま」を廻してその心棒がどちらを向くかによって勝負を決めます。宮城県のような「六角こま」は、それぞれ面に絵が書いてあり、紙にも同じ絵が出たところで勝負を決めるものもあります。「平こま」は、誰れが一番長く廻わすかを競争しあう「こま」で、老若男女が楽しみながら遊びます。

曲芸師の真似そして「巻ひも」の上で廻したり、手の平に乗せたりして遊ぶこともできますが技がむずかしいようです。

こまと民族 こまは中国から伝来した散楽雑戯の一種と云われています。神仏祭では独楽占師がおって吉凶の占い具として用いられている。庶民から遊び具として愛用されるようになったのは、江戸時代の曲芸師、大導芸人が曲芸を興行するようになってからである。特に博多・長崎・京。江戸が盛んで、「長崎こま」。「博多こま」を「曲こま」と江戸では呼んでいます。江戸中期頃より「べいこま」流行するようになってから、廻る時間の大小を競うようになり、「けんかこま」を用いるようになった。「こま」は「木地師」たちの余技から生れ伝えられたもので、現代では各種の「民芸こま」が作られるようになって来ました。「こま」は「一人立ち」をしようとする子らへ親の願いがこめられたり、安全祈願、などの信仰的要素も見られ、九州では、「お守りこま」さえ売られています。

昭和四十九年度第一回の「私のコレクション展」は山形市鈴川在住の高嶋一元氏所蔵品です。